

# 動態地誌的観点と歴史的観点を取り入れた地域構造図の作成： 神奈川県川崎市を事例に

牛 垣 雄 矢\*

地理学分野

(2015年8月28日受理)

## 要 旨

本稿では、地理学的に地域を理解するために、動態地誌的観点、歴史的観点、地域的差異の観点について、それぞれを重視した地域構造図を作成するとともに、それら表現の異なる地域構造図を比較し、それぞれの特徴について考察した。また動態地誌的観点と歴史的観点の両者を取り入れた地域構造図を作成することにより、地域が「どのようなになっているか」ということだけでなく、「なぜ、そうなったのか」ととらえることができた。暗記科目と認識されやすい社会科科目においては、事象の要因や背景を理解することが重要であり、動態地誌的観点・歴史的観点を取り入れた地域構造図は、地理教育においても有効性を発揮するであろう。

キーワード：動態地誌的観点、歴史的観点、地域的差異、地域構造図、川崎

## 1. はじめに

現行の学習指導要領において、中学校の地理の地誌学習では、動態地誌的な観点を取り入れて、地域における事象間の関連を追及・説明する学習を通し、地理的な見方や考え方の基礎を養うことを重視している(文部科学省2008)。高等学校の地理教育も含めて、従来の羅列型・暗記型の地誌から脱却を図るには動態地誌的な方法が効果的と考えられているが、地理を専門としない教員ほど、地域の中でどの地理的事象を中核とし、どのように他の事象と結びつけるか、といった判断が難しいとも言われている(山口2011, 小林2012)。

研究者や教員、また地理を学習する子供たちや一般の市民も含めて、地域を知る際によく利用されるのが地誌書である。二宮書店の『日本地誌』や朝倉書店の『日本の地誌』といった代表的な日本の地誌書は辞書的色合いも強く網羅的であるために、それぞれの地域で中核となる事象や他の事象との関連が分かりやすく

書かれている訳ではない。そのため地理を専門としない教員にとっては、これらの地誌書から地域構造のポイントを理解するのは難しいかもしれない。本稿で事例地として取り上げる川崎における優れた地誌書である小川(2003)も網羅的な内容となっている。本稿では、地域の特徴や地域構造を理解しようとする人々にとって、その助けとなるような動態地誌的な観点による地域構造図を提示したい。

「動態地誌」とは、以前の地誌学習のように地域の事象を網羅的に把握するのではなく、その地域において中核となる事象を核として他の事象を関連づけて地域を理解する方法である(図1)。「動態」という語源は、ドイツの地理学者・シュベートマン(*Spethmann, H.*)が、1928年にドイツのルール地方を対象に工業を中核とした『動態地誌』(“*Dynamische Länderkunde*”)と題する地誌書を出版したことに由来するが、彼が開発したのは地誌的考察の方法であり、地域変化の考察を意味するものではない(中條ほか2014)。

ところで、動態地誌的方法を取り入れている中学

\* 東京学芸大学 人文科学講座 地理学分野 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

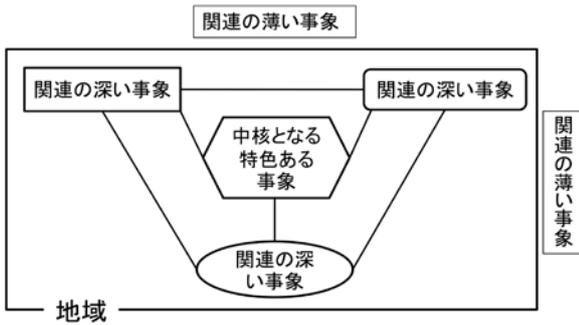


図1 動態地誌のイメージ

2013年日本地理学会春季学術大会シンポジウム「地誌学と地誌教育（諸地域学習）」資料（報告者：濱野 清）より作成。

校の地誌学習で示されている7つの中核テーマ（自然環境、歴史的背景、産業、環境問題・環境保全、人口や都市・村落、生活・文化、他地域との結び付き）のうち、「歴史的背景」、「環境問題・環境保全」、「他地域との結び付き」の3つは、地域の事象というよりは地域の見方といった方が近い（松田2012）。本稿では、地域の特徴や地域構造を理解するために動態地誌的観点を取り入れた地域構造図を作成するが、その際は地域の主たる事象や構成要素を結び付ける形で表現する。

中学校の地誌学習は日本の地誌が中心であり、その空間スケールは地方（「関東地方」、「九州地方」など）である。それが高等学校では国や州（「ヨーロッパ」、「アメリカ」など）となり、川崎市を事例として本稿で扱う空間スケールとは異なる。したがって、本稿は中学校や高等学校の地誌学習に直接参考になるというよりは、地誌学習や「身近な地域学習」における「地域のとらえ方」に関する一考察として位置づけたい。

また、本稿では動態地誌的観点とともに歴史的観点も取り入れて地域をとらえたい。中学校や高等学校の地理分野における地誌学習では、現行の学習指導要領からは歴史分野との連携を密にし、地理的事象における歴史的背景を重視することが示されている（文部科学省2008, 2009）。地理学者の戸所も、世界で生じている現象について情報を得る際には、脳内の時空間軸の書棚に入れて整理していく感覚が必要と述べており<sup>1)</sup>、近年では地理学や地理教育において歴史的観点が重要視されている。本稿で作成するような動態地誌的観点を取り入れた地域構造図は管見の限り多くは見当たらないが、それに歴史的観点を取り入れたものとなると更に少ない。

そこで本稿では、地理学的に地域を理解するために、動態地誌的観点、歴史的観点、地域的差異の観点につ

いて、それぞれを重視した地域構造図を作成するとともに、それら表現の異なる地域構造図を比較し、それぞれの特徴について考察した。また、動態地誌的観点と歴史的観点の両者を取り入れた地域構造図を作成し、その有効性について考察した。

本稿では神奈川県川崎市を事例地とする。これは著者にとって身近な地域であるのみならず、動態地誌的観点と歴史的観点から地域をとらえるのに適した地域と考えるためである。高度経済成長期までは国内有数の工業都市として明確な特徴を有していたが、近年は工場の海外移転等によって従来の性格が変化している。また、川崎市は南北で性格が異なるため、研究対象地域内の地域的差異を踏まえた地域構造図について考察するのに適しており、かつ東京に隣接するために中心都市と衛星都市との関係を考察するにも適している。同様の理由により、かつては田中啓爾も『地理的総合研究 川崎市と東京江東地区』と題した地誌学的総合研究を川崎で行っている。

本稿の構成は以下のとおりである。2章では動態地誌的観点を重視し、工業都市時代の川崎の地域構造について、工場を中核として他の事象との関係性を示した地域構造図を作成して地域の特徴をとらえる。3章では歴史的観点を重視し、現在の川崎の特徴をもたらした背景を探る形で地域の特徴をとらえる。4章では川崎市内部の地域的差異に着目して地域の特徴をとらえる。5章では2章で示す動態地誌的な地域構造図をベースとして、3章で示す歴史的観点を重視した図の利点を取り入れ、歴史的観点を踏まえた動態地誌的観点による地域構造図を作成して地域の特徴をとらえる。最後に6章では本稿で考察したポイントについて整理する。

## 2. 動態地誌的観点による地域構造の把握

### 2.1 工場集積と工業都市の形成

川崎は、かつては国内有数の工場集積地であり、工業都市として知られていた。これらの工場の多くは東京に本社を構える企業である。東京は近世期から100万都市であったともいわれるように市街地が広がっていたため、明治期以降に工業化が進行する際にも広い工場用地を確保することが難しく、工場は多摩川を隔てた川崎市に集積した（川崎市市民ミュージアム2007）。1881（明治14）年の迅速測図（「神奈川県武蔵国橘樹郡川崎駅」）をみても分かる通り、当時の川崎は小さな宿場町のほかは農地と空地が広がっていた。このような現金収入を得るのが難しい地域に工場

が集積することで、人々の暮らしは経済的には豊かになり、工場は町の発展の象徴でもあった。著者の出身校である川崎市幸区の小学校の校歌には「煙立ち 鉄の塔立つ 大空に 希望のひとみ かがやかし」とあり、工場から排出される煙がモノを生産している証であり、それをみた子供たちが希望を抱いていたことが表現されている。1912年には当時の川崎町長が、工場誘致を以後100年の町是とすることを発表した。第二次世界大戦前後（以後、戦前・戦後とする）にかけて臨海部に重化学工業が集積し、戦後はそれによって生じた環境汚染が公害として広く認知されることとなった（芹澤1994）。

岩間（2005）は川崎における工業の集積と地域社会の形成過程を模式化している。これによると、近世期は東海道の宿場町として小規模な集落が形成されているにとどまったが、明治期以降に川崎駅前、臨海部、南武線沿線の内陸部へと工場立地が拡大した。工業集積の初期は、工場の敷地内に労働者およびその家族の住居や、それらの人々が生活するための購買部が併設されていた。著者の経験においても、JR川崎駅の西側に隣接していた東芝の体育館は、近隣の中学校での球技大会や地域のバスケットボールチームの練習・大会等で使用されていた。日本鋼管（現・JFEエンジニアリング）によって設立された川崎区の日本鋼管病院は、川崎市内の多くの人々によって利用されている。このように、「工業都市」といわれたとおり、当時の川崎の工場は地域社会を形成する核的存在であった。

工場労働者世帯は所得が低い場合も多いため、当時の川崎には低廉なアパートも多く、そのような地域社会の特徴は子供たちの学力や地域の治安などにも関係してくる。商業の面においても、工場労働者が好むような大衆的な居酒屋などが多く、逆に買回り品店などは人口規模のわりには非常に少なかった。政令指定都市の中で一人当たりの小売販売額を比較すると川崎市は非常に低い値を示す（牛垣2008）。一般的に最寄品は近隣の商店で購入することが多いため、人口当たりの小売販売額が少ないのは、川崎市内外に住む人々が買回り品を川崎市内で購入せず、東京都や横浜市内の店舗で購入していることを示している。これを象徴するように、川崎市内で唯一の百貨店であったさいか屋川崎店も2015年5月31日に閉店し、付近の日航ビルの一フロアで店舗を構えるのみとなっている。

## 2.2 工業都市以降の変化

国内の他の工業都市と同様、川崎においても1980年代以降に工場の国内外への移転が進んだが、その跡

地へ企業・大学・県や市による研究開発（R&D）施設や（川崎市経済局2005）、オフィスビル・マンションが立地した。研究所やオフィスは工場と同様に東京に本社を構える企業によって設立された。これらのオフィスや研究所に勤めるのは、以前の工場労働者のようないわゆるブルーカラー層ではなく、ホワイトカラー層といわれる人々である。工場跡地に建設されたマンションの中には、川崎駅や武蔵小杉駅など鉄道交通上の利便性の高い駅付近に立地するものも多く、それなりに高い価格帯の中・高級マンションといえる。ここに住む人の多くは東京都に勤務すると予測される。マンション居住者やオフィス・研究所に勤務する人の多くはホワイトカラー層であり、この社会層の変化により近年ではラゾーナ川崎プラザや駅ビルのアトレなどにおいて中・高級品を扱うテナントも見られる<sup>2)</sup>。このように、工場跡地へオフィス・研究所・マンションが立地したことで、川崎の社会層は変化し、それに伴って商業的な特徴も変化がみられる。

## 2.3 川崎の地域構造とその変化

以上をもとに、川崎における地域構造とその変化を示したのが図2である。工業都市時代には東京に本社を構える企業の工場が集積し、その工場に勤める労働者向けの住宅や商店、医療・文化施設ができ、公害がもたらされるなど、工場が良くも悪くも地域を特徴づける中核的な役割を果たしていた。一方、1980年代以降は工場の移転により、先と同様に東京に本社を構える企業の研究所・オフィスやマンションが立地した。これらの研究所やオフィスへの勤労者やマンション居住者の存在により、住宅や商店は中・高所得層向けのものが加わり、今日の川崎は新旧の性格が混在する状態となっている。

この今日の川崎の地域構造を踏まえ、教育上の課題について若干考察したい。工場労働者世帯が多くを占めた以前は、川崎市の南部は学力や治安の面で問題を

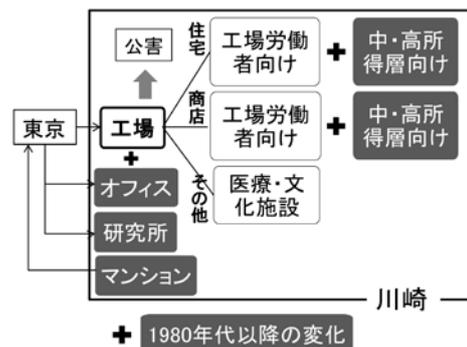


図2 動態地誌的観点を重視した川崎の地域構造図

抱えていた。今日ではホワイトカラー層も多くみられるようになってきたことで学力や治安も改善傾向がみられるとも考えられるが、教育現場では学力が高い子と低い子が両極端となり、教育水準をどのレベルに合わせるかが難しいという<sup>3)</sup>。地域の性格は学校現場における教育の在り方にも大きく関係するため、地域に合った教育を実践するためにも地域の特徴を正確に把握する必要がある、動態地誌的観点による地域の理解は有効といえる。

図2のような地域構造のまとめ方は、ある時点において中核となる事象・要素と他の事象・要素間とのつながりがとらえやすい。従来からの地域構造のとらえ方として、木内(1968)は「一地域を構成している諸要素と諸因子の関係」と説明しており、図2は地域構成要素間の関係性を重視した地域構造図といえる。一方、図2中では、変化については「+」で新たに加わった要素を示しているが、その要因についてはとらえにくい表現となっている。また図2では川崎市内部における地域的差異についてはとらえることができない。

### 3. 歴史的観点による地域構造の把握

#### 3. 1 今日の特徴

地域における何らかの特徴ある事象について、それがもたらされた要因を追求するための方法の一つとして、その事象の一つ前の時代に遡る歴史地理学的方法が有効な場合がある。教育現場において、子供たちは基本的に今の地域を日常的に目にしていることから、現在の地域の特徴がもたらされた要因を探るために歴史的観点をを用いるのが有効と考える。

今日の特徴として、一つは顕著な人口増加があげられる。それは景観的には多くのマンションが立地していることに表れており、子供たちは毎日その景観を目にしている。人口増加率は政令市の中でトップで、人口数は2015年4月1日現在で1,476,444人となり、京都市を抜いて全国で7番目となった<sup>4)</sup>。その受け皿となったのは武蔵小杉駅や川崎駅周辺をはじめとした工場跡地に建設された高層マンションである。現在の景観や地図ではマンションが立地している場所も、工業都市時代の地図(例えば一万分の一地形図「鶴見」(昭和23年修正)、同「矢口」(昭和30年修正)など)をみれば、ほとんどが工場であったことが分かる。子供たちは現在の地域の姿しか眼にしていないうちで、地図を広げれば一目で教科書や副読本で学ぶ「工業のまち」「工業地帯」であったこ

とが理解できるため、身近な地域学習には新旧の大縮尺地図が有効である。

今日の特徴として、二つ目には川崎駅に隣接するショッピングセンター(以下SCとする)であるラゾーナ川崎プラザがあげられる。これは国内のSCで売上げ日本一を誇る。その要因の一つが、神奈川県内の鉄道駅の中では横浜駅に次いで2番目の乗降客数を誇るJR川崎駅のすぐ西側に隣接していることにある。このような好立地の場所に広大な敷地を獲得することができたのは、この地が東芝の堀川工場の跡地であったためである。東芝の前身に当たる東京電氣会社がこの地に工場を建てた1908(明治41)年当時、川崎はほんの小さな集落であり、駅に隣接した場所でも広大な工場用地が獲得できた。1906(明治39)年に現在のテクノピアの場所に工場を設けた明治製糖と並んで、東芝は川崎における近代工業の立地の先駆けといわれる。

三つ目には研究開発(R&D)施設の集積があげられる。具体的にはごみや廃棄物を減らしたり再資源化する技術をもつ環境配慮型の研究所・工場や、生命化学関係の研究所が集積し始めている。環境配慮型の工場・研究所が集積したのは、公害の経験を踏まえて環境への負荷を減らす試みが蓄積された結果であり、川崎区臨海部のゼロエミッション工業団地が代表的な例である(川崎市環境産業革命研究会2005, 川崎市経済局2005)。また生命化学関連の研究所は、羽田空港の神奈川口が開通すれば川崎は海外からの玄関口に位置することを見込んで集積を図っているもので、現在でもアジア各国へ技術提供をしている<sup>5)</sup>。

最後に四つ目として、音楽の街としての活動があげられる。川崎は、大気汚染が大幅に改善された2003年ころにおいても、川崎に対するイメージは「工場が多い」や「街が汚い」といった、工業都市であったことから派生したネガティブなものが上位となっていた。この川崎に対する負のイメージの払拭を目的に企画されたのが音楽の街構想であった。象徴的な施設であるミュージア川崎は関東最大級のパイプオルガンを備え、東京交響楽団とフランチャイズ契約を結び、地元の中学生たちの演奏会なども開催している。このほか、駅前や商業施設の空きスペースをミュージシャンの活動の場として提供する企画もある(牛垣2008)。

#### 3. 2 今日の特徴をもたらした歴史的要因

前節であげた現在の川崎の4つの特徴は、いずれも以前は工業都市であったことと関係している。マンションやラゾーナ川崎プラザは工場の跡地にできたも

のであり、環境配慮型の研究所・工場の集積や音楽の街としての活動は、公害やそのイメージに対する対応の結果としてもたらされたものである。今日の川崎は工場も減少し大気汚染も問題が少ないレベルに改善されているため、今の子どもたちにとって工業都市や公害は学校等で学ぶ過去の事象となっており、日常的に実感できるものではない。それでも、子どもたちが日常的に目にする現在の川崎の特徴がもたらされた大きな要因として、以前は工場が集積していたことがあげられるため、やはり工場が川崎に与えた影響は非常に大きいといえる。

では、そもそもなぜ工場が川崎へ集積したのか。先述のとおり、既に市街地化が進んでいた東京では広大な工業用地を確保するのが難しく、東京に隣接しながらも安く広い工業用地を確保できるということがその最大の要因であった。また、近代工業の集積の先駆けとなった明治製糖と東芝はJR川崎駅のすぐ西側に立地し、ここでの工場誘致の後に、当時の町長がその必要性を強く認識したことにより、川崎町の町是として積極的な工場誘致を展開することとなる(川崎市市民ミュージアム 2007)。したがって、日本初の鉄道として新橋・横浜間が開通した際に途中駅として川崎駅も開設されたことは、川崎の工業化にとって重要な出来事であったといえる。近世期には小さな宿場町であった<sup>6)</sup>川崎にいち早く駅が設けられたのは、宿場町の川崎宿の存在以上に、江戸時代から参拝客が多かった川崎大師の存在が大きかったともいわれる<sup>7)</sup>。明治製糖や東芝に次いで、日本コロンビアは1909(明治42)年、富士紡績と味の素は1914(大正3)年に創業するが、これらは川崎大師の参拝路線として開通していた京浜急行大師線沿いに立地している。川崎の工場立地に対するこの鉄道路線の影響も大きいとも考えられ、その開設の要因となった川崎大師の存在も、川崎の工業化に大きな影響をもたらしたといえる。

上記、川崎の今日の特徴とそれをもたらした歴史的要因について整理したのが図3である。人口増加が顕著で高層マンションが多いこととラゾーナ川崎の存在は、過去に工場が立地していたことと直接関わり、環境配慮型の工場・研究所の集積や音楽の街としての活動は、工場が集積したことによって生じた公害の経験が関わっていた。工場が川崎へ集積した背景は、東京に隣接しながらも比較的安く広い土地が確保できると、川崎駅や京浜急行大師線の存在によると考えられる。川崎駅の開設や大師線敷設には川崎大師の存在と宿場町であったことが関係していると考えられてい

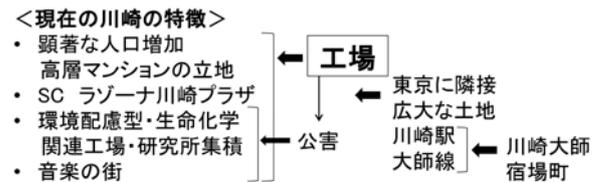


図3 歴史的観点を重視した川崎の変化図

る。このように、現在の地域の特徴からスタートして、その特徴がもたらされた要因を把握するには、過去を遡る歴史的観点が有効となる。これをまとめた図3は、現象の要因と結果の時間軸上での関わりがとらえやすい。

千葉(1972)が示した地域構造図は、八重山諸島における人口減少問題を解く鍵としてマラリアを中核的な事象として取り上げ、それが生じた背景となる出来事を発生順序により矢印でつなぐ形で表現されているため、時間軸における地理事象のつながりがとらえやすい表現となっている。一方、この図は「廃村」や「村落人口の激減」をゴールとして、それに結びつく事象が示されているが、例えば「マラリア」や「湧水」といった要素は、八重山諸島の地域の特徴を説明する主要な構成要素とは言えないかもしれない。図3も、川崎における現在の特徴からスタートして時間軸で事象の因果関係を示したものであり、千葉が示した地域構造図に近い表現といえる。この表現の場合は、中核としている事象とつながりのない事象は捨棄されるため、図2で示したような地域における主要な要素間のつながりは見えにくくなる。

#### 4. 地域的差異を踏まえた地域構造の把握

第2章3節で述べたように、図2の地域構造図は、地域内部の差異を踏まえないで表現されているが、現実には川崎市内でも臨海部・南部・北部<sup>8)</sup>とでは大きく性格が異なる。よく知られた地域構造図の一つに、ブリューネによるフランスの地域構造図があるが<sup>9)</sup>、このような地域の事象や要素の位置関係をふまえた地域構造図も主要な表現方法の一つといえる。そこで、川崎市内の地域的差異を踏まえた地域構造図を図4に示す。

臨海部は、産業道路以南の地区に当たり、重化学工場が集積する地帯で、過去には公害問題が顕在化した地区である。現在は、工場は国内外へ移転したものが多く、変わって環境配慮型の工場や生命化学関係の研究所・工場が増えている。住宅はもともと少ない。

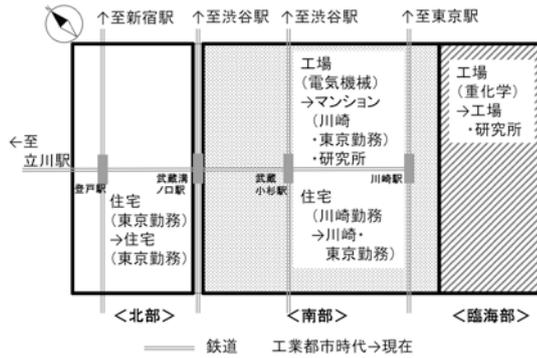


図4 川崎市内の地域的差異を重視した地域構造図

図中の矢印(→)は、工業都市時代から現在にかけての変化を意味する。

南部は、産業道路以北で溝の口以南の地区に当たり、川崎駅の東芝、武蔵小杉駅のNEC、武蔵中原駅の富士通などを始め、南武線沿線の駅周辺に電気機械工場が立地した地区である。これらの工場も今日では移転し、マンションや各種研究所に代わっているものも多い。もともと住宅地であり、工業都市時代は臨海部の工業地帯に近いことで川崎区への勤務者も多かったが、近年では東京都内で勤務する人も増えている(牛垣2008)。

以上の2つは工業都市としての特徴を有した地区であったが、北部はまったく異なる性格となっている。工場は少なく主に住宅地が広がっているが、その居住者の勤め先のほとんどは東京都内であり、「川崎都民」などとも表現される場合もある(牛垣2008)。臨海部や南部は工業都市川崎としての性格が顕著であったが、北部はむしろ東京の郊外のベットタウンとしての性格が強く、川崎市内でも南北で大きく性格が異なっている。

図4は、川崎市内の3地区それぞれの主要な要素が示され、それがどのように変化したのかを矢印で記している。地域内部の差異が表現されているが、地域構成要素間のつながりは表現されておらず、この点については把握しにくい表現である。現象の変化については矢印で示しているが、これは工業都市時代の事象が現在はどのようになったか、といったことのみが示されており、変化の要因については描かれていないため、時間軸上での変化をとらえるには不十分である。

### 5. 歴史的観点を取り入れた動態地誌的地域構造図の作成

第1章で確認したとおり、「動態地誌」とは、地域において中核となる事象を核として、他の事象との関

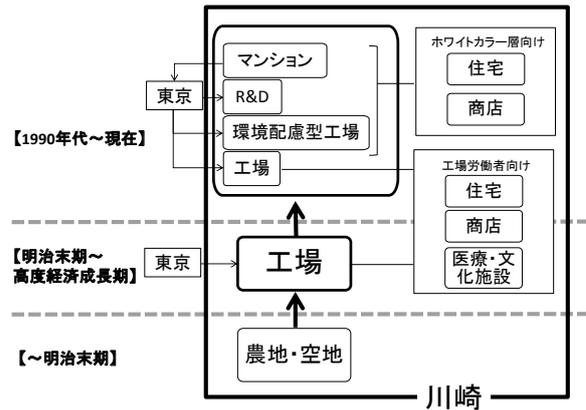


図5 動態地誌的観点と歴史的観点を取り入れた川崎の地域構造図

係性から地域をとらえるものである。動態地誌の考え方では、地域の事象や構成要素間のつながり・関係性が重視されていることから、本稿で示した図2~4の中では、やはり動態地誌的観点から作成した図2がそれを上手く表現しており、その点においては好ましいものといえる。

しかし図2では、近年に求められている歴史的背景の理解には不十分である。時間軸上での変化をふまえた地域構造図が示されることは少なく、管見の限りでは都市の地帯構造を年表の中に取り入れた永野(1971)や、身近な地域学習として取り上げた幕張ベイタウンについて首都圏の地域変容を踏まえて模式図化した長倉(2012)などに見られる程度である。そこで、図2の動態地誌的な地域構造図をベースとしつつも、時間軸の変化を取り入れた地域構造図として作成したのが図5である。

なお図5では、図4のような川崎市内における地域的差異は扱っていない。地域的差異に焦点を当てると、地域の中核的な事象と他の要素との関係性が見えにくくなり、地域を動態地誌的に把握するには適していないと考える。ここでは、図4における「北部」は除外し、工業都市としての性格を有する「南部」「臨海部」の2地区を対象とする。

図5をみると、図2のように工場を中核として住宅や商業、医療・文化施設といった地域構成要素が関係をもっていることが把握できるとともに、今日の川崎の特徴といえるマンション、R&D施設、環境配慮型の工場が、工業都市時代の工場の跡地として立地していることや、そもそも工場が集積したのは広大な農地・空地が存在したためということも読み取ることができる。動態地誌的観点によりまとめた図2と、歴史的観点によりまとめた図3の良い部分を合わせた形となっている。動態地誌的な観点でまとめた図2では、「地

域はこうなっている」という地域構造は理解できるが、「なぜ、そうなったか」の理解は不十分であり、図5はこの点においても改善されている。事象の要因や背景を理解するという事は、ともすれば暗記の科目と認識されがちな社会科においては重要なことである。地理教育を受ける子供たちのみならず、指導する教員や一般の人々も含めて、時空間軸での地域の理解が進むよう、我々地理学者が歴史的観点を踏まえた分かりやすい地域構造図を提示していく必要がある。

## 6. まとめ

本稿では、地理学的に地域を理解するために、動態地誌的観点、歴史的観点、地域的差異の観点から、それぞれを重視した地域構造図を作成するとともに、それら表現の異なる地域構造図を比較し、それぞれの特徴について考察した。また、動態地誌的観点と歴史的観点を両者を取り入れた地域構造図を作成し、その有効性について考察した。本稿の要点を整理すると、以下のとおりとなる。

①本稿の図2に示した地域構造図は、地域を特徴づけるのに中核となる事象・要素と、その他の主要な事象・要素のつながりを重視したもので、動態地誌的観点により作成したものである。地域における主要な事象・要素間の関係性はとらえやすいが、地域変化の要因や地域内の差異はとらえにくい表現である。地域の特徴は社会層にも影響し、それは学校教育にも影響することが多い。地域ないし子供たちの特徴に合った教育を行うための「地域のとらえ方」としても有効な表現といえる。

②図3は歴史的観点を重視した図で、現在の川崎の特徴を中核としてそこからスタートし、その特徴がもたらされた要因を把握するために過去に遡る形で表現されている。これは、事象の要因と結果が時間軸上で示されており、その点については理解しやすいが、中核・スタートとする事象・要素と因果関係としてつながらない事象・要素は捨象されるため、地域における主要な事象・要素間のつながりはとらえにくい表現といえる。このような地域の現在と過去を扱う地域学習には、新旧の大縮尺地図が有効である。

③図4は川崎市内の地域的差異を重視した図で、地域が単一ではなく内部で多様な性格を有する点については理解しやすい。しかし地域の主要な事象・要素間のつながりや、地域変化の要因については理解しづらい表現である。

④図5は、動態地誌的観点でまとめた図2をベース

として、歴史的観点を取り入れて時間軸上での因果関係を加えた表現である。地理的な見方として重要な「事象・要素間のつながり」を重視したために、図4のような川崎市内の地域的差異は把握できない。図2と同様に、地域における主要な事象・要素間の関係性が分かるために、地域が「どのようになっているか」が分かりやすいだけでなく、「なぜ、そうなったのか」ととらえることもできる表現となっている。暗記科目と認識されやすい社会科科目において、事象の要因や背景を理解することは重要であり、この歴史的観点を取り入れた動態地誌的な地域構造図は、地域理解にとって有効な表現と考えられる。

## 謝辞

本稿は、2015年5月23日に開催された人文地理学会地理教育・歴史地理合同研究部会（於・滋賀大学大津サテライトプラザ）における発表内容を骨子として、当日の議論を踏まえて加筆・修正したものである。この際にご意見を賜った先生方に厚くお礼を申し上げます。

## 注

- 1) 2013年3月29日に開催された日本地理学会春季学術大会（於・立正大学）における「地誌学と地誌教育（諸地域学習）シンポジウム」での戸所隆のコメントより。
- 2) ラゾーナ川崎プラザのCOACH、アトレの高級化粧品店など（日本経済新聞2012年8月23日（木）朝刊より）。
- 3) 元川崎市立中学校教諭からのヒアリングにより。
- 4) 日本経済新聞2015年4月16日（木）朝刊より。
- 5) 日本経済新聞2015年3月31日（火）朝刊、同4月16日（木）朝刊、同6月18日（木）朝刊、同6月23日（火）朝刊、同7月22日（水）朝刊などより。
- 6) 青野・尾留川編（1967）『日本地誌 第8巻 千葉県・神奈川県』の第173図「宿駅と助郷」によると、神奈川県内における東海道沿いの宿場町の家数は、川崎151、神奈川505、保土ヶ谷453、戸塚265、藤沢878、平塚408、大磯878、小田原1281、箱根198であり、川崎の集落規模が最も小さいのが分かる。
- 7) 朝日新聞デジタル2014年3月25日より。<http://www.asahi.com/articles/ASG3K6R8ZG3KULOB034.html>（最終閲覧日：2015年8月23日）。
- 8) 本稿では、重化学工業が集積した川崎区の産業道路以南を臨海部、電気機械工業などが駅前に立地した溝の口以南で産業道路以北を南部、溝の口以北を北部とする。

9) 手塚 (1991) などで紹介されている。

科学・社会科学・自然科学, 62, pp. 23-30.

山口幸男 (2011) : 地理学習における動態地誌的学習の理論.

山口幸男編『動態地誌的方法によるニュー中学地理授業の展開』明治図書出版, pp.11-21.

## 文献

- 青野壽郎・尾留川正平 (1967) : 『日本の地誌 第8巻 千葉県・神奈川県』二宮書店, p.574.
- 岩間英夫 (2005) : 川崎・鶴見と尼崎の比較からみた総合工業地域社会の内部構造とその発達過程. 地域研究, 46 (1), pp.38-65.
- 牛垣雄矢 (2008) : 川崎市における地域構造の変化—産業と商業地の動向より—. 地理誌叢, 49 (1), pp.16-33.
- 小川一郎 (2003) : 『川崎の地誌 新しい郷土研究』有隣堂, p.167.
- 川崎市環境産業革命研究会 (2005) : 『川崎エコタウン—環境産業革命のさらなる展開をめざして—』海象社, p.132.
- 川崎市経済局 (2005) : 『川崎の産業 2005』川崎市, p.57.
- 川崎市市民ミュージアム (2007) : 『産業都市・カワサキのあゆみ 100年—進化しつづけるモノづくりの街—』川崎市市民ミュージアム, p.83.
- 木内信蔵 (1968) : 『地域概論—その理論と応用—』東京大学出版会, p.375.
- 小林正人 (2012) : 高等学校地誌学習の今後の方向性. 新地理, 60 (1), pp.19-23.
- 芹澤清人 (1994) : 『検証 川崎公害』多摩川新聞社, p.181.
- 田中啓爾編 (1959) : 『地理的総合研究 川崎市と東京江東地区』古今書院, p.360.
- 千葉徳爾 (1972) : 地域構造図について (一). 地理, 17 (10), pp.64-69.
- 手塚 章 (1991) : 地域的観点と地域構造. 中村和郎・手塚章・石井英也『地域と景観』古今書院, pp.107-184.
- 中條暁仁・岩本知之・早馬忠広 (2014) : 中学校社会科における動態地誌的学習の特質と課題—「日本の諸地域」を中心として—. 静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇, 45, pp.71-81.
- 長倉 健 (2012) : 動態地誌的アプローチを取り入れた「首都圏」と「身近な地域」の教材開発—単元「首都圏のくらしと幕張ベイタウン」—. 新地理 60 (1), pp.14-18.
- 永野征男 (1971) : 都市化における歴史的慣性の地理学的考察—愛知県刈谷市の事例研究—. 日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要, 6, pp.13-28.
- 文部科学省 (2008) : 『中学校学習指導要領解説 社会編』 p.161.
- 文部科学省 (2009) : 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』 p.169.
- 松田隆典 (2012) : 動態地誌による「日本の諸地域」の授業開発とその地理教育上の意義. 滋賀大学教育学部紀要人文